

2024 年度
一般入試＜前期＞
2024 年 1 月 30 日実施分

問題と解答

国語

国語

I 次の文章を読んで、後の問い（問1～10）に答えなさい。

人間は「万物の霊長」と呼ばれる。つまり生物の中でもっとも優れているというのである。

優れているかどうかはともかく私たちホモ・サピエンスは地球でもっとも成功した生物である。どうしても進化を遂げたのだろうか。

生物の進化を見てみよう。

四〇億年前に地球に誕生した生命。しかし、その進化は順調に進んできたわけではない。^A地球に生まれた生命には、何度も危機が訪れた。それが海洋全蒸発と全球凍結と呼ばれる地球規模の大異変である。

地球に生命が生まれたころ、直径数百キロという小惑星が地球に^⑦シヨウとつした。そのエネルギーで海の水は、すべてが蒸発し、地表は気温四〇〇〇度の灼熱^{しやくねつ}と化した。そして、地球に繁栄していた生命は減ってしまったのである。このような海洋全蒸発は、一度ではなく、何度か起こったかも知れないと考えられている。

このときに生命をつないだのが、地中奥深くに追いやられていた原始的な生命であったと考えられている。

次に訪れた危機は、地球の表面全体が凍結してしまうような大氷河期である。地球の気温がマイナス五〇度にまで下がった全球凍結によって、地球上の生命の多くは滅びてしまった。しかし、今度は海深くに追いやられていた生命が生き延びたのである。

このように地球に危機が起きるたびに、命をつないだのは、繁栄していた生命ではなく、競争を逃れ僻地^{へきち}に追いやられていた生命だったのである。わずかに生き延びた生命は全球凍結の後に、大きな進化を遂げる。

全球凍結の地球では、ほとんどの生命は生存できない。二酸化炭素を吸収する生物もおらず、火山活動の中で二酸化炭素濃度が上昇していく。その後、全球凍結が終わると、高い濃度の二酸化炭素によって、植物性のバクテリアが大繁栄し、そして植物性のバクテリアが作り出した大量の酸素によって、動物性のバクテリアもまた繁栄を遂げるのである。

⑤。そして、五・五億年前の古生代カンブリア紀、生物の種類が爆発的に増加する。これが「カンブリア爆発」と呼ばれる出来事である。

⑥カンブリア爆発によって、さまざまな生物が生まれると、そこには強い生き物や弱い生き物が現れた。そして、弱い生物は、強力な肉食生物に対抗するために、さまざまな進化を遂げたのである。

あるものは、三葉虫のように体のまわりを固い殻で囲って身を守った。⑦、体の小さな生き物は、いくら体を固くしても、大きな天敵にバリバリと食べられてしまう。そのため、体の小さな弱い生き物は、体の中に脊索と呼ばれる筋を発達させて、肉食生物から逃れるために早く泳ぐ方法を身につけた。これが魚類の祖先である。

しかし、脊索を発達させた魚類の中にも、強い種類が現れる。そうすると、弱い種類は、脊索を背骨に発達させて、背骨にミネラルを蓄えるように進化した。そして、海に棲む生き物が⑧シンに⑨うできないような、ミネラル分の少ない汽水域の浅い海に逃れたのである。

しかし、汽水域も⑩あんたいではなかった。やがて汽水域にも強い生き物が現れる。弱い生き物は、強い生き物から逃れるように、よりミネラル分の少ない川や湖など淡水域へと、生存場所を求めていった。

水が大量にある大海と異なり、小さな川や水たまりのような池は、雨が少なければ干上がってしまう。⑪そんなコクな環境を乗り越えていくうちに、生物は陸上生活へと進化を遂げて行った。生物の上陸は、両生類の祖先が、大志を抱いて挑戦したわけではない。弱い生物が逃れ逃れていくうちに、⑫止むにやまれず、新天地へと追い立てられていったのである。【Ⅰ】

しかし、ミネラル分を骨に蓄えることで、生物の骨は⑬強靱化し、陸上で巨大化することが可能となった。【Ⅱ】

巨大な恐竜が闊歩^{かつほ}していた時代、人類の祖先はネズミのような小さな哺乳類であった。私たちの祖先は、恐竜の目を逃れるために、夜になって恐竜が寝静まると、エサを探しに動き回る夜行性の生活をしていたのである。常に恐竜の捕食の脅威にさらされていた小さな哺乳類は、脳を発達させて、敏速^{びんしゅう}な運動能力を手に入れた。【Ⅲ】

そして、恐竜を逃れて、逃げ隠れしていた敏捷な哺乳類は、恐竜が絶滅するほどの地球環境の変動を乗り越えることができたのである。

樹上に生活の場を求めた哺乳類の一部は、サルへと進化を遂げた。【Ⅳ】

人類の進化は、未だ^{いま}に多くの謎を秘めている。しかし一説には、豊かな森の一部が乾燥し、草原となっていくなかで、身を隠すための森を失ったサルは、天敵を警戒するために二足歩行をするようになり、身を守るために道具や火を手にするようになったと言われている。【Ⅴ】

こうして生物の進化をたどってみると、私たちの祖先は常に危険にさらされる弱い存在であった。だからこそ「弱者の戦略」を発達させ、困難を乗り越えてきたのである。

後のソウ^①さくとする説もあるが、進化論で有名なチャールズ・ダーウィンの言葉に次のようなものがある。

「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残るのは、変化できる者である」

人類の進化をたどれば、私たちは常に弱者であった。弱者は常にさまざまに工夫し、②に生きること求められる。そして、他の生物がいやがるような変化にこそ、弱者にチャンスが宿るのである。

我々の祖先は変化を受け入れ、困難を乗り越えながら進化を遂げてきた。私たちは、そんな「たくましく弱者」の子孫なのである。

苦難の道を乗り越え、今や人類は万物の霊長として地球に君臨している。

しかし、けつして驕ることがあつてはならない。

⑤

もし、丸腰のまま大自然の中に置き去り

にされたとしたら、人間ほど弱い存在はないだろう。

西洋の諺にこんな一節がある。

③「一番強い者は、自分の弱さを忘れない者だ」

私たちは弱い存在である。だからこそ、強く生きることができるのである。

（稲垣栄洋『弱者の戦略』より）

問1 太線部ア～オのカタカナで表記された部分に使用する漢字を、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

④ か コ ク	① シ ヨ ウ と つ
5 4 3 2 1 告 穀 克 酷 国	5 4 3 2 1 衝 勝 症 将 障
⑤ ソ ウ さ く	② シ ン に ゆ う
5 4 3 2 1 操 搜 総 想 創	5 4 3 2 1 侵 伸 浸 診 振
	③ あ ん タ イ
	5 4 3 2 1 待 泰 体 隊 帯

問2 二重傍線部①・②はそれぞれ本文中でどのような意味で用いられているか。最も適当なものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

- | | | | | | | | | | |
|-----------|-------|--------|-----|---------|-------|--------|--------|-----|---------|
| ① 止むにやまれず | | | | | ② 敏捷な | | | | |
| ③ | | | | | ④ | | | | |
| 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 仕方なく | だんだんと | いつのまにか | 絶えず | 何度も繰り返し | 力の弱い | とても小さい | 警戒心の強い | 臆病な | 賢くてすばしい |

問3 空欄①・②に入れるのに最も適当なものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

- | | | | | | | | | | |
|----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| ① | | | | | ② | | | | |
| ③ | | | | | ④ | | | | |
| 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| また | つまり | しかし | なぜなら | だから | 自発的 | 画一的 | 社会的 | 現実的 | 戦略的 |

問 4

波線部①「地球に生まれた生命には、何度も危機が訪れた」とあるが、地球に危機が訪れるたびに地球の生命にはどのようなことが起こったのか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

⑩

- 1 地球に危機が起これば地球に繁栄していた生命はほとんど滅びてしまったが、そうした生命のうち地中の奥深くや深海などの僻地に逃れた生命は生き延びることができた。
- 2 地球に危機が起これば地球に繁栄していた生命の多くは滅びてしまったが、その一方で、地中の奥深くや深海などの僻地に追いやられていた生命は生き延びることができた。
- 3 地球に危機が起これば地球の生命はすべて滅びてしまったが、その後しばらくすると、地球の奥深くや深海などの僻地で新たな生命が生まれて進化し、繁栄を遂げていった。
- 4 地球に危機が起これば地球に繁栄していた生命は滅びたり地中の奥深くや深海などに追いやられてしまったりした一方で、それまで僻地に追いやられていた生命が進化し、繁栄を遂げていった。
- 5 地球に危機が起これば地球に繁栄していた生命はほとんど滅びてしまったが、地中の奥深くや深海などに追いやられていた生命は、さらに僻地に逃れることによって生き延びることができた。

問5 空欄⑧に入れるのに最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

⑪

- 1 全球凍結が起こるたびに、地球上の生物は絶滅し、それまでにない新たな生物が誕生した
- 2 全球凍結が起こるたびに、大きな生物は滅び、生物の体はだんだんと小さくなっていった
- 3 全球凍結が起こるたびに、それを取り越えた生物は、繁栄し、さまざまな進化を遂げた
- 4 全球凍結が起こるたびに、人類の祖先は生き残り、他の生物とは違う進化を遂げてきた
- 5 全球凍結が起こるたびに、生物の種類は増加し、強い生物と弱い生物が対立するようになった

問6

波線部⑧「カンブリア爆発によって、さまざまな生物が生まれると、そこには強い生き物や弱い生き物が現れた」とあるが、「カンブリア爆発」が起こったあとの強い生き物や弱い生き物の生き方についての説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

⑫

1 カンブリア爆発のあと、弱い生き物は強い生き物に対抗するために体を固くしたり脊索を発達させたりしたが、それでも身を守ることができなくなると、弱い生き物は体を進化させるのではなく生存場所を変えることによって生き延びてきた。

2 カンブリア爆発のあと、弱い生き物は強い生き物に対抗して進化したが、弱い生き物が進化すると強い生き物の中にも同じように進化するものが現れるため、弱い生き物はさらに進化するといったことを繰り返しながら生き延びてきた。

3 カンブリア爆発のあと、弱い生き物は強い生き物に対抗して進化したり、強い生き物から逃れるために生存場所を変えたりしたが、そうしたことをしてもまた強い生き物が現れるため、弱い生き物は進化や逃避を何度も繰り返していった。

4 カンブリア爆発のあと、弱い生き物は強い生き物と対抗したり逃れたりして生き延びてきたが、弱い生き物の中には同じことを繰り返すうちに強い生き物がいなくても主体的に進化していくものが現れ、そうした生き物が陸上生物へと進化していった。

5 カンブリア爆発のあと、弱い生き物が生き延びるには体を変化させるか生存場所を変えるかしなければならなかったが、そうしたことができて生き延びることができたのはごく一部で、ほとんどの弱い生き物はカンブリア爆発から時間がたつにつれて消えていった。

問7

空欄⑤に入れるのに最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

13

- 1 道具と火の力を手にしたときから、人類は地球上で最も強い存在となったのである
- 2 道具と火の力を借りて強さを誇っているものの、人類は自然界では弱い存在である
- 3 道具と火の力を持っても、この先人類よりもっと強い生物が現れるかもしれない
- 4 道具と火の力がなかったとしても、現在の人類はどの生物よりも強い存在なのである
- 5 道具と火の力を利用することによって、人類はそれまでよりさらに強い存在となったのである

問8

波線部◎「一番強い者は、自分の弱さを忘れない者だ」とあるが、筆者はこの諺を引用してどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

⑭

- 1 自分の弱さを忘れない者はそれまで生きてきたなかでさまざまな危機や困難を経験しているため、そうした経験を生かして、どのようなことが起こってもそれをうまく乗り越えることができるということ。
- 2 自分の弱さを忘れない者は体が小さくて目立たない者が多いため、大きな危機が起きたときに、体が大きくて強い者のようにあえて逃げ隠れるようなことをしなくても自然と生き残ってしまうということ。
- 3 自分の弱さを忘れない者は自分よりも強い者との対立を避けるだけでなく、自分と同じあるいは自分よりも弱い者との対立も避けようとする傾向があるため、結果的に長く生きることができるということ。
- 4 自分の弱さを忘れない生き物は自分たちが生き延びるために常にさまざまな工夫をしているため、たとえ大きな困難に直面したとしても、逃げ隠れたり変化をしたりして生き延びることができるということ。
- 5 自分の弱さを忘れない者はもともと高い記憶力を持っていることが多いため、さまざまな危険から逃れて生き延びる方法を子孫に伝え、何代にもわたって繁栄することができるということ。

問9 本文には次の一文が抜けている。その入る位置として最も適当なものを、後の1～5のうちから一つ選びなさい。

⑮

そして人類は急速な発展を遂げていき、かくして弱者は「近代」を作っていくのである。

5	4	3	2	1
〔	〔	〔	〔	〔
V	IV	Ⅲ	Ⅱ	I
〕	〕	〕	〕	〕

本文の内容に最もよく合致するものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

1 ホモ・サピエンスは地球でもっとも成功した生き物であり、「万物の霊長」として地球に君臨しているが、人間がそのような成功を収めることができたのは、常に弱い存在であった人間の祖先が「弱者の戦略」を発達させ、さまざまな困難を乗り越えながら進化してきたためであった。

2 地球上に現れたさまざまな生き物の中で人間だけがもっとも成功し、現在のように地球に君臨することができたのは、人間の祖先は脳が特に発達していたため、他の弱い生き物とは違って「弱者の戦略」を行ってさまざまな困難を巧みに乗り越えることができたからであった。

3 人間が「万物の霊長」として地球に君臨することができた最大の要因は、多くの弱い生き物が行ってきた「弱者の戦略」によるものではなく、恐竜という天敵から逃れるなかで脳が発達し、その結果、他の弱い生き物とは違って道具や火を使うことができるようになったためである。

4 地球上ではこれまで膨大な数の強い生き物や弱い生き物が誕生しては消えていったが、そうした生き物の中で人間の祖先は「弱者の戦略」を特に積極的に行うことによってさまざまな困難を乗り越えて進化を続け、その結果、現在のように「万物の霊長」として地球に君臨することができた。

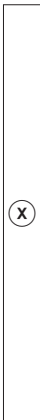
5 人間の祖先はもともと地球の生き物の中でも特に弱い存在であったが、ダーウィンの言葉にあるように、さまざまな危険にさらされるなかで常に変化し続けた結果次第に強い生き物となっていく、大規模な地球環境の変動でもっとも強い生き物であった恐竜が絶滅すると、恐竜に代わって地球に君臨するようになった。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問い（問1～10）に答えなさい。

「コミュニケーション」ということばはもとともラテン語の *communicatio* にはじまって、まずフランス語の語彙となり、それが近世英語になったもの。だが、それが世界的規模で頻繁につかわれるようになったのは二十世紀なかばのことであった。日本でこのカタカナ語がはじめて出現したのも一九五〇年代のこと。新語である。

コミュニケーションの基本になるのは「面談」である。人間どうしジカに会って話をするのである。目と目があって、それदनにかを合点する。とにかく人間と人間、おたがい理解を深めるためには直接に会って話をするにこしたことはない。「顔と顔」の直接コミュニケーションだから *face to face*、略して FTF などともいう。【 I 】

じつさい、人間の「顔」というものはおもしろい。おたがい目鼻をはじめいくつもの器官をもっているがその配置はひとによってちがう。



。ちょっと見ただけで、それがだれであるかがわかる。わたしたちはうまれな

がらにして、おたがいの生きた「顔」を識別するふしぎな能力をもっているのである。現代の技術はひとの眼窩や鼻梁などいくつもの点を三次元でつなげて「顔認識」を可能にして出入国の管理に応用したりするようになったが、生きた「顔と顔」の相互認識能力というのはおそろしいほど正確だ。

本人確認ができて、やっと「顔と顔」のおつきあいができる。どこにいても認識してもらえただけ交際の範囲がひろければ「顔がひろい」というし、そのひろさによって世間からタヨリにされる「顔役」もある。「顔」こそが個体識別の有力な手段だから、「顔を立てる」「顔にドロを塗られた」「顔パス」など、「顔」という観念は①にカクさんしている。「顔」あつての人間コミュニケーションなのである。

①外交関係にしてもそうだ。交通・通信手段が飛躍的に進歩したこんにち、それぞれの国の大統領や首相は相互に招待したり訪問したり、定例の会議をかいサイしたりして「個人的関係」を構築することにとめる。外交のことは大使館をつうじてやって

いればいい、というのは理屈だが、指導者どうしが「面会」しなければいけない問題は解決できない。すくなくとも友好関係を維持するためには「顔と顔」が物理的、いや生理的に向き合うことが必要なのである。【Ⅱ】

ではなぜ「顔と顔」の対面コミュニケーションが必要なのか。それは生身の人間どうしが至近距離で向き合わなければおたがい「体感」できないからである。「体感」というのは、おおげさにいえば全人的接触ということである。現実生きて、呼吸している人間にはまずその身体があり、握手すれば体温を感じることができる。わたしたちがほんとうに深いコミュニケーションをかわすことができるのは、そういう「体感」をともなった現実の人間どうしの対面の場合だけなのだ。

そうでなくても恋人どうしは、ただいっしょにいただけでたのしい。デートがおわって、さよなら、といったとたんにまた会いたくなる。友人どうし、いちど会いたいなあ、といって歓談^aしたり食事をともにしたくなるのも生きた人間の「体感」をもとめているからだ。

会えば、相手のふくソウ、歩き方、一挙一動、表情、女性のばあいだったら持ち物、アクセサリ、化粧のかすかな香料のにおいにいたるまで、そのひとをとりまく「雰囲気」がまずわたしたちの感覚器官にとびこんでくる。「ことば」によるコミュニケーション以上に強烈なのは人間の存在そのものが発する「実在感」なのである。

学校の授業^bも「実在感」があるからだいじなのだ。科目が数学であろうと英語であろうと、学習欲のある学生なら教科書や参考書を読めばたいいていのことは学習できる。それにもかかわらず、きめられた時間に教室で席につくのは文字どおり目と鼻の先でこう^cぎなさっている先生の肉声にふれ、黒板に書かれる文字を目で追うことによってはじめて生き生きとした学習が体験できるからである。前後左右にいる級友たちの呼吸が感じられ、かれらと共通経験をわかちあうことができるからである。ノートや辞書をめくる紙ずれの音、教室のなかのあの独特のにおい。そうした全感覚を動員した「体感」があるからこそ学校という場の教育がだいじなのだ。【Ⅲ】

実務の世界でも、ふだんは電話ですむような用事でも、相手方としっかり商談を煮つめ、数千万円におよぶ交渉や契約、とい

うことになる。

⑤

。めでたく商談が成立すれば、どちらかが席を設け、一夕を談笑のうちに
すぐす、といったこともあるだろう。話題はささいな世間話。あとはカラオケといった宴席であつても、一種の皮膚感覚のよう
なものが相互に刺戟^{しげき}されて「交際圏」を強化してくれるのである。

そればかりではない。「体感」によるコミュニケーションはいろんな解釈も可能にしてくれる。なごやかな会話をたのしんで
いるようにみえても、相手が腕時計に目をむけているのは、そろそろ切り上げたい、ということの意味している。俗に「目は口
ほどにものをいい」ともいう。ゴフマン^⑥ (Erving Goffman) の有名な「顔のはたらき」(face work) もこのような「ことば」
にとらわれないコミュニケーションについてのこうサツであつた。【 IV 】

それに「ことば」が発せられていても、そのことばを体感的にうけとることができないこともある。たとえば不祥事があると、
当事者が「このたびは多大のご迷惑をかけ……」と定型文のお詫^わびのことばをのべ、「再発防止に努力いたします」といつて最
敬礼する情景にはテレビでよくおめにかかるが、あれはおおむね用意された文章をただ読み上げているだけ。②、あんまり

反省・謝罪の「気持ち」がつたわってこない。そういうとき、謝罪されるほうは「誠意がない」といつて不満をしめす。おおげ
さに土下座されても体感的にはかえつて不愉快だ。ちゃんと謝っているじゃありませんか、といつても無駄である。③巧言令色^⑦
鮮^⑧なきかな仁」ともいう。コミュニケーションというものはやたらにおしゃべりをするからいい、というものではなさそうなの

である。【 V 】

(加藤秀俊『社会学』より)

(注) 鮮^⑧なきかな……少なきかな。

問1 太線部㉗㉘㉙のカタカナで表記された部分に使用する漢字を、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

㉔
 ㉒
 こうぎ
 5 4 3 2 1
 偽 技 儀 議 義

㉗
 ㉑
 カクさん
 5 4 3 2 1
 隔 確 核 拡 各

㉙
 ㉓
 こうさつ
 5 4 3 2 1
 擦 察 撮 冊 札

㉘
 ㉒
 かいさい
 5 4 3 2 1
 催 再 載 債 祭

㉕
 ㉑
 ふくそう
 5 4 3 2 1
 奏 争 掃 層 装

問2 二重傍線部①・②はそれぞれ本文中でどのような意味で用いられているか。最も適当なものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

- | | | | | |
|--------------|---------|---------|----------|-------|
| ① 歓談 | | | | |
| 22 | | | | |
| 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| どうしてもいいことを話す | 秘密の話をする | 大事な話をする | たのしく話し合う | 長い間話す |
-
- | | | | | |
|--------|-----|------|----|----|
| ② おおむね | | | | |
| 23 | | | | |
| 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ところどころ | きっと | だいたい | 多分 | 全て |

問3 空欄①・②に入れるのに最も適当なものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 空欄① | | | | |
| 24 | | | | |
| 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 比喩的 | 有機的 | 暫定的 | 絶対的 | 部分的 |
-
- | | | | | |
|-----|------|------|-----|-----|
| 空欄② | | | | |
| 25 | | | | |
| 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ただし | あるいは | ところが | だから | さらに |

問4 空欄⑧に入れるのに最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

26

- 1 うまれたばかりの子どもはみな似たような顔をしているが、成長していくにつれて顔のちがいはつきりしてくる
- 2 「赤の他人」の顔を見分けることはできないが、親しい関係になれば顔のちがいが簡単にわかるようになる
- 3 人間はほかの動物とはちがつてメガネをかけたり化粧をしたりするため、顔のちがいはさらにおおきなものとなる
- 4 「他人のそら似」といわれるほど似ているひともあるが、それぞれの個人の顔というものはそれぞれに微妙にちがう
- 5 子どものころはひとの顔を見分けることができないが、大人になるとしだいに見分けられるようになっていく

問5

波線部①「外交関係にしてもそうだ」とあるが、これはどのようなことを言っているのか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

27

- 1 社会人が仕事上のつきあいだけでなく個人的なつきあいも大切にするのと同じように、それぞれの国の大統領や首相も公的な関係だけでなく「個人的関係」を構築することをだいじにしているということ。
- 2 わたしたちが他人とつきあい始めるときにはまず本人確認をするのと同じように、外交の場でも、それぞれの国の指導者が直接顔を合わせる前に相手がどのような人物かをよく調べて理解しておくということ。
- 3 世間では「顔と顔」の直接コミュニケーションが大切にされているのと同じように、国と国との関係でも指導者どうしが直接顔を合わせてコミュニケーションをすることが重視されているということ。
- 4 わたしたちが日頃から「面会」をつうじて対人関係の問題を解決しているのと同じように、外交においても問題を解決しなければならぬときには指導者どうしが「面会」しなければならないということ。
- 5 現代社会では交通・通信手段が飛躍的に進歩したことによってひとびとの移動が活発になったのと同じように、世界各国の指導者も相互に招待したり訪問したりする機会が増えているということ。

問6

波線部⑧「学校の授業」とあるが、筆者が「学校の授業」が「だいじ」だと考えているのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

②8

- 1 学校という場では、先生の話を聞いたり友人と競い合ったりすることによって、自分一人にいるときよりも学習欲を高めることができるから。
- 2 学校という場では、自分一人で勉強しているときとは違って、何か問題が生じたときにすぐに先生や友人に相談することができるから。
- 3 学校という場では、先生や友人と「ことば」によるコミュニケーションをすることとおして、生き生きとした学習をすることができるから。
- 4 学校という場では、先生や友人が存在するという「雰囲気」を「体感」するだけで、心身ともに充実した気分になることができるから。
- 5 学校という場では、先生や友人などと直接接することとおして、教科書や参考書を読むだけではできない体験や経験をすることができるから。

問7

空欄⑤に入れるのに最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

29

- 1 テーブルをはさんでなんべんも「面談」することが必要になってくる
- 2 一社員ではなく、しかるべき立場の人間でなければ話が前に進まない
- 3 口約束ですませるのではなく、きちんとした書類を交わさなければならない
- 4 これまで学校で学んできたことが実際に役に立っていることが実感できる
- 5 何年にもわたって交渉が続けられるなどといったことも珍しくはない

問8

波線部◎「『巧言令色鮮なきかな仁』ともいう」とあるが、これはどのようなことを言っているのか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

30

- 1 不祥事の謝罪会見のように不特定多数のひとに話すときには、おしゃべりにならないように気をつけたほうがよいということ。
- 2 自分に非があるにもかかわらず、「ちゃんと謝っているじゃありませんか」などと開き直るような態度を取る人間は信用してはならないということ。
- 3 いくら謝罪しても謝罪されるほうはなかなか納得してくれないなどといったように、自分の気持ちをことばだけで伝えるのは難しいということ。
- 4 不祥事があつたときに定型文のお詫びのことばをのべる当事者のように、口のうまい人間は不誠実であることが多いということ。
- 5 一般的に考えられていることとは違って、コミュニケーションというものはことばが少なければ少ないほど相手に気持ちがよく伝わるということ。

問9

本文には次の文章が抜けている。その入る位置として最も適当なものを、後の1～5のうちから一つ選びなさい。

③1

歌舞伎の名セリフに「互いに見交わす顔と顔……おお、読めた」というのがあるが、ひとが「読む」のは「ことば」だけではない。「顔」をはじめ、さまざまな「しぐさ」も読みとる能力をもっているのである。

5	4	3	2	1
〔	〔	〔	〔	〔
V	IV	III	II	I
〕	〕	〕	〕	〕

本文の内容に最もよく合致するものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

32

- 1 日常生活の中で、友人や恋人と食事をしたり学校の授業に出たりして相手の存在を「体感」することは相手との友好関係を維持するために必要であるが、人間どうしがおたがいを本当に理解するためには「体感」だけではなく「ことば」によるコミュニケーションが不可欠である。
- 2 交通・通信手段が飛躍的に進歩した現代社会でもコミュニケーションの基本は人間どうしが至近距離で「顔と顔」を向き合わせることであつて、そうしたことをとおしておたがいを「体感」することによつて、「ことば」だけのコミュニケーションよりもさらに理解を深めることができる。
- 3 「顔がひろい」「顔役」など「顔」に関するさまざまなことばがあることからわかるように「顔」というものは人間どうしのコミュニケーションに欠かせないものであつて、「顔と顔」を向き合わせさえすれば誰とでも深いコミュニケーションができ、友好関係を築くことができる。
- 4 現在の日本では「対面」によるコミュニケーションがごくふつうに行われているが、そうしたコミュニケーションが重視されるようになったのは、交通・通信手段が飛躍的に発達し、人間どうしが直接会うことが簡単にできるようになった二十世紀なかばのことであつた。
- 5 人間どうしがコミュニケーションをするときには「顔と顔」を向き合わせることが理想であるが、たとえ直接対面することができなかったとしても、あらかじめ個人的関係を構築しておけばおたがいに「実在感」を「体感」し、深いコミュニケーションを実現することができる。

〔問題終了〕

2024年度 一般入試＜前期＞解答 1月30日実施分

国語		
解答番号	解答	配点
①	5	2
②	5	2
③	4	2
④	2	2
⑤	1	2
⑥	1	2
⑦	5	2
⑧	3	2
⑨	5	2
⑩	2	5
⑪	3	3
⑫	3	5
⑬	2	3
⑭	4	5
⑮	5	5
⑯	1	6
⑰	2	2
⑱	5	2
⑲	1	2
⑳	1	2
㉑	4	2
㉒	2	2
㉓	3	2
㉔	5	2
㉕	2	2
㉖	4	3
㉗	3	5
㉘	5	5
㉙	1	3
㉚	4	5
㉛	4	5
㉜	2	6